

## 大きな大きな一セット

「一勝の重み」という言葉は聞いたことがあります、「一セットの重み」というのは初めて経験しました。全敗でした。しかし、一セット取ったのです。大きな大きな一セットだったように私は思いました。

土曜日は瑞浪市中学校総合体育大会（以下、中体連大会と呼びます。）がありました。私は女子バレーボール大会の担当校長になり、総当たりの三試合を見届けました。担当校長ですが、北中の校長であることは隠せません。冷静を装いながら、心の中では北中のバレーボール部を応援していました。

しかし、現実には厳しいものがありました。北中は善戦空しく、全敗という結果でした。とりわけ、初戦の瑞浪南中学校戦では、ネットぎりぎりの高さを通過する早いサーブに苦戦し、一セットも取るできませんでした。

「一試合目の完敗を、二試合目に引きずらなければよいのだが」と心配しましたが、北中は引きずるところか、漸くエンジンがかかってきたようでした。一試合目では、エンジンが冷えているうちに低くて速いサーブにやられたという感じてました。

二試合目の第一セットを落とす後の二セット目でした。すごいサーブや強烈なアタックがあるわけではない瑞浪北中ですが、みんなで声を出し合って気持ち確かめ合い、全員でカバーし合ってボールを拾いました。三年生にとっては、このセットのために三年間の部活やクラブに取り組んできたと言ってもよいかもしれません。

スポーツの取り組む者の目標は、もちろん「勝つこと」です。つらい練習に取り組んできたのはそのためです。しかし、目的は違います。スポーツを通して自分を磨き上げ、仲間関係において絆を作り上げることです。

したがって、全敗しても一セット取れたことの中に、成長した自分、作り上げられた絆がしっかり焼き付いているはずだと思います。このことは、大人になってからしみじみとわかります。

今は負けた悔しさがこみあげてくるでしょう。「中学校」という響きが懐かしくなってくるころに、必ず昔話に花が咲きます。その時に真っ先に口から出る話題は部活動です。「私が北中のバレーボール部にいた頃はね」などと話せるようになったら、勝敗以上の尊いものが染みついていったということです。

私は中学校時代に野球部に所属していました。同年が四人、後は、一つ下の後輩たちを入れてチームを組んでいました。私たちが市内大会では一勝もできませんでしたが、今ではその後輩たちとよい関係で過ごしています。部活をやっていたから、そういう人間関係も生まれなかったことでしょうね。勝つことだけではないのです。スポーツが結び付けてくれた縁というものかもね。

（六月二十八日 記）